あいち健康の森公園

Aichi Health Village Park

石川 眞澄*

Masumi ISHIKAWA

はじめに

我が国の平均寿命が80年を超え、21世紀には4人に1人が65歳以上になるといわれる状況の中で、豊かな人生経験を持った人々が健康で意欲的に社会活動に参加し、若い世代とともに行動し生活する理想的な長寿社会を築いていく必要がある。

愛知県では、この高齢化社会への対応のシンボルとして「あいち健康の森」という新しい総合拠点の構想を、昭和62年に発表し、その実現を目指し努力を積み重ねたが、ようやく平成9年10月に一部開園を迎えることができた。

「あいち健康の森」は明るい活力に満ちた長寿社会を創造していくための医療、福祉、保健、生きがいなどに関した各分野にわたる施設をまとめて配置し、各々の施設が相互に連携することによって、高度に機能が発揮されることを期待されて計画されたものである。

1. あいち健康の森

昭和60年に国立療養所中部病院が高齢化社会の到来に向けて「老人医療総合センター」を設置する構想を発表し、つづいて愛知県医師会が「健康の森建設構想」を発表した。

これらを受けて、愛知県は昭和62年6月「あいち健康の森（仮称）基本構想」を発表し、場所は大府市と東浦町にまたがる国立中部病院、大府養護学校、大府運動公園などを含む約100ヘクタールを対象として検討を行っていくこととした。

昭和63年度には学識経験者による基本計画策定会議を設け、立地場所と広さ、各施設のイメージ、事業主体、事業方式などの検討が行われた。

この基本計画では、約100ヘクタールの区域を研究ゾーン、運動ゾーン、健康ゾーン、生きがいゾーン、福祉ゾーンの5ゾーンに分け、各種施設を配置していくことにしており、研究ゾーンには国立療養所中部病院と国に設置を要望中の長寿科学研究センターなど、運動ゾーンは大府運動公園の屋外施設を利用して他の施設との連携を図り、健康

ゾーンには健康開発センター、健康科学教育館、滞在型学習施設及び中央管理センターを置き、生きがいゾーンは、スポーツ、レジャー、文化などの大規模なウェルネスランドとして第三セクターによる展開を図る、福祉ゾーンは新しい考え方に基づくコミュニティーケアセンターなど高齢化社会に対応する地域ケアに関連する諸施設を設置することなどが方向付けられている。

なお、平成元年1月には厚生省で長寿科学研究センター（平成5年の工事着手時に国立長寿医療センターと名称変更）を「あいち健康の森」の計画区域に設置することが決定され、計画の実現が加速されることとなった。

2. あいち健康の森公園

「あいち健康の森」の計画区域約100ヘクタールのうち

図－1 あいち健康の森公園計画平面図

*愛知県土木部公園緑地課

約2分の1を健康ゾーン、運動ゾーンとして、県が実施していくこととして位置づけられたが、どのような手法で整備を進めるかが、全体を所管する衛生部の大きな課題であった。都市公園を担当する土木部との綿密な検討の結果、健康開発館等4施設は、内容的にはほとんどが都市公園施設として認められるものであるという判断が出来たため、健康ゾーン、運動ゾーンの約52ヘクタールを都市計画公園として都市計画決定を行い、都市公園の中に衛生部の健康増進、長寿社会に対応する施設が設置許可を受けて設けられるという形をとることになった。

その後、平成2年度には建設省の都市公園補助事業のメニューの一つである地域活性化拠点公園（テーマパーク）総合整備事業による調査費の補助を受けることができ、公園の基本構想、基本計画を周辺地域の活性化、地域産業の振興の方針とともに策定し、事業のスタートを切ることができた。

「あいち健康の森公園」は、健康の森全体の中でも特に一般の人々が自由に利用できる中心的な位置にあるため、次のようなことを重要な役割とすることとした。

- ①誰もが参加できる屋内外を活用した健康スポーツ、生活文化活動の体験実践の場
- ②水辺を中心とした森空間での自然とのふれあい、自然への理解を深めることにより、「共生」を体感できる場
- ③心身をリフレッシュさせる「森」空間での活動を通じた交流の場、ふれあいの場
- ④実践的な活動を通して「新時代の健康」というテーマへの研究、開発、学習の場
- ⑤隣接するゾーンからの活動発展の場
- ⑥健康の森に関する総合的な情報、サービスの提供の場

基本計画ではこれらを念頭に置き、公園の施設内容、配置、機能の検討が行われた。

その結果、交流センター、瞑想の森、ふるさとの森、生きもの達の谷、いのちの池、薬草園などの新設と運動広場、野外活動館、子供の森、大芝生広場などを既存施設の改築で配置することになった。

3. あいち健康の森公園の開園と今後の課題

「あいち健康の森公園」は、県教育委員会が所管の大府運動公園を土木部に移管を受けて、条例上は平成6年4月1日から開園した。

しかし本当の開園といえるのは改修施設、新規施設の一部完成と「あいち健康プラザ（健康開発館等4施設）」の開館の平成9年10月28日で、このときに公園としては駐車場、中央エントランス、交流センター、いのちの池、フォレストブリッジ、大芝生広場の16.8ヘクタールを追加供用し、従来から供用していた区域（テニスコート、ベビー

ゴルフ、北エントランス周辺、子供の森）を加えると41.3ヘクタールを供用することとなった。

その後平成10年11月に運動広場（球技場）、ふるさとの森が完成し、42.3ヘクタールの開園区域となった。

後に残る主要施設は、生きもの達の谷、子供の森の改築、薬草園などであるが、生きもの達の谷と子供の森は平成12年には完成の見込みになった。薬草園は江戸時代の尾張藩の御薬園と管理役の細井長七郎の役宅を復元したものと管理棟、温室などを建設する計画で、総事業費も十数億円を要することから県の財政事情により本格的着工が先送りとなっており、完成、開園は13年度末の予定から数年遅れる見込みである。

「あいち健康の森」としては二期計画に「生きがいゾーン」「福祉ゾーン」を含め約100ヘクタールの計画になっているが、「生きがいゾーン」参画予定の民間企業も経済状況の悪化から、直ちにこの事業を推進することに消極的となり、準備段階のまま保留となっている。

写真-1 あいち健康の森公園

おわりに

愛知県の県営都市公園は、従来は集中投資型ではなかったため計画から一部開園、全体完成までかなりの長期間を要していたが「健康の森公園」は21世紀に向けた県の主要プロジェクトとして衛生部と協力して取り組み、さらに地元大府市、東浦町の絶大な支援もあったため比較的短期間で部分開園、全体完成の見込みがたつようになった。

愛知県では、このように都市公園と他部局の所管する施設と一体的に考え、協力して公園づくりを行っていくことがほとんど無かったが、今後、都市公園の持つ効果、機能を最大限に発揮させるため、また住民にとって使いやすい、楽しく活用できる公園を作るための手法として積極的に取り組んでいく必要があると考えている。